

源氏物語覺書

今西祐一郎

岩波書店

源氏物語覺書

今西祐一郎

岩波書店

源氏物語覚書

1998年7月23日 第1刷発行

著者 いまにしゅういちろう
今西祐一郎

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000

印刷・三陽社 カバー・半七印刷 製本・牧製本

© Yuichiro Imanishi 1998
ISBN 4-00-000655-X Printed in Japan

R (日本複写権センター委託出版物・特別扱い) 本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書は、日本複写権センターへの特別委託出版物ですので、包括許諾の対象とはなっていません。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい。

源氏物語覚書

目次

罪意識のかたち	1
因果応報	25
懺悔なき人々	51
物語と身分	73
宇治十帖への一視点	101
「御時」の物語	121
哀傷と死——「死」の叙法——	137

目次

若紫巻の背景——「北山」考(一)——	173
公季と公経——「北山」考(二)——	201
「みやこ」と「京」——平安京の遠近法——	219
鈴虫はなんと鳴いたか	245
「ふるものがたり」考	259
『源氏物語』のゆくえ	275
初出一覧	293

本書における『源氏物語』、『うつほ物語』の引用は、それぞれ新日本古典文学大系、『うつほ物語 全』(おうふう)により、その冊、頁等を記した。『今昔物語集』の引用は巻十までを日本古典文学大系、以降は新日本古典文学大系によった。なお、引用に際しては、いずれも読解の便を考慮して表記を改めた場合がある。

罪意識のかたち

一

どのような傑作も、この世に突然あらわれ出るものではない。

『源氏物語』とて例外ではなかった。では『源氏物語』はどのようにして世にあらわれたのであろうか。文学史は『源氏物語』にとつて『伊勢物語』が大きな源泉であつたことを教えてくれる。そのことは、はやく江戸時代の人々も認めていた。

此の源氏物語はかの伊勢物語をひろく書きのべたる様の物也と荷田の東万呂あづまろのいひけん、げにさもやと覚ゆる事多し。
(賀茂真淵『源氏物語新釈惣考』)

源氏物語ハ伊勢物語ヲ敷衍シテ作り出ル也。サルニヨリ、能見レバ同ジ趣ノコト多シト、或小諸侯ノ足輕ナル人ノ東満ニ云シト、子ノ在満語あいまろレリ。甚面白キ説也。
(林笠翁『仙台間語』⁽¹⁾)

『伊勢物語』の「書き延べ」、「敷衍」のわかりやすい例として、『源氏物語』からまず第一に挙げられるのは、光

源氏の、藤壺や朧月夜尚侍という帝の妻（もしくはそれに準ずる女）との密通であり、須磨・明石へのさすらいである。いうまでもなく、それらは『伊勢物語』における業平の二条后との密通、業平の東下りにそれぞれ対応する。

しかし、『源氏物語』の密通やさすらいが『伊勢物語』の「書き延べ」であり、「敷衍」であるといわれるゆえんは、たんにそれら『伊勢物語』の一齣を髣髴とさせる状況が『源氏物語』中のあちこちに散見するからではない。そのことは、たとえば業平の東下りにあたる源氏の須磨下向の設定を見ればよくわかる。賢木巻で雷雨の紛れに朧月夜との密会が露頭して源氏追放の策略が始まり、ついで須磨下向になるという展開は、東下りが雷雨の中で二条后を失う六段の直後に語られているという『伊勢物語』の展開を抜きにしては考えられないからである。源氏の須磨下向はあきらかに業平の東下りをなぞっている。

このような『源氏物語』による『伊勢物語』のなぞりが何ゆえ見出されるかといえば、その根本には、『源氏物語』の主人公光源氏に、『伊勢物語』の「男」すなわち業平の姿が色濃く投影されていたからであった。

この点については、南北朝時代の注釈書『河海抄』が次のように明言する。

光源氏をも安和の左相に比すといへども、好色のかたは道の先達なるがゆへに、在中将の風をまねびて、五条、二条の后を、薄雲女院、朧月夜の尚侍によそへ、或はかたの、少将のそしりを思へり。

「安和の左相」とは、藤原氏の謀略によつて安和二年（九六九）に失脚、大宰権帥に左遷された醍醐天皇皇子、源高明のこと。光源氏生涯の大事件である須磨下向はその高明の左遷になぞらえ、その多彩な恋愛生活は在五中将在原業平にならつて構想されたのが『源氏物語』だ、という見解である。これは後々の注釈書、たとえば『岷江入楚』においても「好色の事は在中将の風をまなべり。則ち二条の后に准じて薄雲女院、二条尚侍（おほる月夜也）に

密通の事をかけり」というふうに受け継がれていった。

さて、業平と二条後の密通の「書き延べ」であり「敷衍」である光源氏と藤壺との密通は、それだけで終らず、冷泉帝の誕生と即位とをもたらして源氏の栄華の礎となる。歌物語として語られた恋物語の短章から、長篇物語の筋のかなめへ、という「書き延べ」、「敷衍」は、叙述のたんなる延長累加ではありえない。そこには当然、質の變化が伴っていたはずである。ならば『源氏物語』における『伊勢物語』の「書き延べ」、「敷衍」は、何を『源氏物語』にもたらしただろうか。あるいは、『伊勢物語』の密通は、『源氏物語』の「書き延べ」、「敷衍」によってどのような変貌をとげたのであろうか。

それは、人間関係における時間と内面の出現というかたちをとった。「時間」とは密通の子の誕生、「内面」とは密通をめぐる当事者の意識の謂いである。前者は主として長篇物語としての『源氏物語』の構想に関与し、後者は心理小説としての『源氏物語』の一面を形成する。そして前者が具体的なかたちを示してわかりやすいのに対し、後者は事柄の性格上必ずしもわかりやすいとはいえない。密通の当事者光源氏の、あるいは藤壺の内面はどのように描かれたか。

二

光源氏の「好色」の先達、業平は、二条后への恋に破れ、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして（『伊勢物語』四段）

と嘆いたり、「足ずりをして泣」いたりはしたけれども（同六段）、その恋自体について「身分違いの恋は苦しいも

のだ」という以上の反省はしなかった。

むかし、男、身はいやしくて、いとなき人を思ひかけたりけり。すこし頼みぬべきさまにやありけむ、ふし
て思ひ、起きて思ひ、思ひわびてよめる、

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高きいやしきくるしかりけり

むかしも、かかることは、世のことわりにやありけむ。(同九十三段)⁽²⁾

それに対して光源氏はどうであつたか。藤壺との密通が語り出される若紫巻に次のような叙述がある。

僧都世の常なき御もの語り、のち世の事など聞こえ知らせ給ふ。わが罪のほどおそろしう、あぢきなきことに
心を占めて、生ける限りこれをおほしなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべきおほしつゝけて、かう
やうなる住まひもせまほしうおほえ給ふものから、昼の面影心にかゝりて恋しければ……。 (二六頁)

おなじ若紫巻であるが、この一文はそれより前、わらわ病みの治療に北山の「なにがし寺」へ出かけた源氏が、
そこで山籠りをしている僧都の接待を受け、語り合う場面である。いかにも僧の話らしい世間無常、後世のあれこ
れを聞いて源氏が思いをめぐらす「わが罪」とは、何か。思えばそれは光源氏の先達、『伊勢物語』の「男」が一
度も口にしたことのない言葉であつた。

源氏の罪業とは何なのだろう。これだけの人が世の栄花を捨てて出家生活をし、罪業を軽くしたい、とまで考
えるとは、よほど大きな道徳上の罪である。「わが罪のほどおそろしう……」以下の、このもののしい表現
は、読者の胸に強く印象づけられて忘れられない。(玉上琢彌『源氏物語評釈』)

「わが罪」は、『孟津抄』という古注の一書にしたがつて「藤壺の事を含む」源氏の罪、と解することができる。

とすれば、藤壺との密通はその事が起こる前から、あるいは少なくともそれが語られる前から、すでに源氏にとっては「罪」と意識されていたことになる。この「読者の胸に強く印象づけられて忘れられない」罪は、物語の展開とともにどのように語られていくのであろうか。

しかし、光源氏と藤壺の密通およびその後を「罪」という語に注目して追って行っても、はかばかしい成果は得られない。たとえば次に掲げるのは、昭和十四年から刊行された『潤一郎訳源氏物語』の「序」において、谷崎潤一郎が「そのまゝ現代に移植するのは穩当でないと思はれる部分」であるがゆえに「そこのところだけはきれいに削除してしまつた」と述べざるをえなかつた、若紫巻の源氏と藤壺との密通場面の、そのさわりの部分である。

宮もあさましかりしをおぼし出づるだに世ともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむ、と深うおぼしたるに、いとうくて、いみじき御けしきなるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心ふかうはづかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、などかなのめなることだにうちまじり給はざりけむ、とつらうさへぞおぼさるゝ。何事をかは聞こえつくし給はむ、くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜^{なみよ}にて、あさましう中／＼なり。

見ても又逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるゝわが身ともがな（源氏）

とむせかへり給ふさまもさすがにいみじければ、

世語りに人や伝へんたぐひなくうき身を覚めぬ夢になしても（藤壺）

おほし乱れたるさまもいとことわりに、かたじけなし。命婦の君ぞ御なほしなどはかき集め持てきたる。

殿におはして、泣き寝に臥し暮らし給ひつ。御文なども例の御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも、

つらういみじうおほしほれて、内へもまゐらで二三日籠りおはすれば、又いかなるにかと御心動かせ給ふべかるも、おそろしうのみおほえ給ふ。(曰一七六―七頁)

ここには、そしてこの前後の文章にも、「罪」という語は見当たらない。そこには恋の苦しみは語られていても、罪の意識は稀薄である。若紫巻だけではない。密通の結果藤壺が身ごもった源氏の子(後の冷泉帝)が誕生し、父帝の抱くその子をはじめ見たときの源氏の様子についても、同じことがいえる。

中将の君、面の色変はる心ちして、おそろしも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたぐうつろふ心ちして、涙落ちぬべし。物語りなどしてうち笑み給へるがいとゆゝしううつくしきに、我が身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおほえ給ふぞ、あながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は中／＼なる心ちの乱るやうなれば、まかで給ひぬ。(紅葉賀 曰二五三―四頁)

北山の僧都の話聞いて「わが罪のほどおそろしう」と思った源氏はどこへ行ってしまったのか。『源氏物語』は「罪」というような大げさな言葉を使うことを途中から放棄したのであるうか。そうではない。「つみ(罪)」という語はさまざまな文脈において物語の最後までまんべんなく一八八回も使われている(『源氏物語語彙用例総索引』による)。しかし問題はそれら多数の「罪」が用いられている文脈である。

実は密通の当事者である源氏や藤壺に関しても「罪」が用いられていないわけではなかった。賢木巻でふたたび藤壺の聞ちかくに近付いた源氏は、次のような言葉で藤壺に迫る。

「世の中にありと聞こしめされむいとはづかしければ、やがて亡^うせ侍りなんも、又この世ならぬ罪^{つみ}となり侍りぬべき事」など聞こえ給ふも、むくつけきまでおほし入れり。(曰三六三頁)

源氏が口にしたこの「罪」は、しかし密通それ自体を指すのではなく、藤壺に逢うことを拒まれた源氏の、死後の妄執の謂い、すなわち、あの世においてまで藤壺への愛執に囚われ成仏できないことの罪である。

また、右大臣一派から失脚させられて須磨へ下る際の、源氏の藤壺への別れの言葉にも「罪」は見える。

我が御心にもなか／＼いまひときは乱れまさりぬべければ、念じ返して、たゞ、「かく思ひかけぬ罪」にあたり侍るも、思ふ給へあはすることのひとふしになむ、空もおそろしう侍る。をしげなき身はなきになしても、宮の御世にだにことなくおはしまさば」とのみ聞こえ給ふぞことわりなるや。（須磨 四一七頁）

この「罪」は一読して明らかのように、官位を剝奪されて須磨へ下ることを指す。そして肝心の密通にかかわることは、この文中では「思ふ給へあはすることのひとふし」という、当事者同士にしか分からないような言い回しで語られていることに注意しておこう。

一方、藤壺の場合はどうか。帝亡きあと、弘徽殿大后方の圧迫をかわすために剃髪した藤壺は、源氏との間の子東宮の将来を仏前でこのように祈る。

……わが身をなきになしても東宮の御世を平かにおはしまさば、とのみおぼしつゝ、御おこなひたゆみなく勤めさせ給ふ。人知れず、あやふくゆ、しう思ひきこえさせ給ふ事しあれば、我にその罪をかろ軽めてゆるし給へ、と仏を念じきこえ給ふに、よろづを慰め給ふ。（賢木 四三八二頁）

藤壺が「我にその罪を軽めてゆるし給へ」と念じたときの「その罪」とは藤壺自身の「罪」ではなく、「人知れず、あやふくゆ、しう思ひきこえさせ給ふ」すなわちその子東宮が帝の子ではない、という人はいえぬ秘密に由来する、東宮の罪である。

源氏も藤壺も「罪」を口にし心に念じはするけれども、それらは二人の密通に直接かわるものではなかった。ということになると、最初に挙げた若紫巻の「わが罪のほどおそろしう」だけが例外的に、密通に関して用いられているのであろうか。右の考察を踏まえればその「罪」にも再考の余地はあるように思われる。既述のとおり、その「わが罪のほど……」という源氏の心中が記されているのは、二人の密通より前の時点であった。その点に注意すれば、そもそもその「罪」がただちに密通の罪であると考えるのはいささか早計ではあるまいか。

はやく野村精一は、左に引用した「罪」の諸用例の検討をふまえて「藤壺と『つみ』という語との関係は極めて薄い」と指摘し、問題の「わが罪のほどおそろしう……」の「罪」についても、

古来源氏の倫理観を示すものとされているが、これも直接密通そのものを罪とするのではなくて、思い悩む事自身について言っているのではないだろうか。（藤壺の「つみ」について）⁽³⁾

と述べる。密通そのものを「罪」という語で示そうとしない他の用例との整合性を考慮すれば、いかにも従うべき見解である。

なお、源氏については前述の若紫巻以外にもう一例、物語の進行のずっと後、薄雲巻に至って藤壺との密通が「罪」を含む語で回想される箇所がある。

これはいと似げなき事なり、おそろしう罪、深き方は多うまさりけめど、いにしへのすきは思ひやり少なきほどのあやまちに、仏神もゆるし給ひけん、とおぼしきますも、なほこの道はうしろやすく深き方のまさりけるかな、とおぼし知られ給ふ。（三二四四頁）

これは六条御息所の没後、その娘秋好^{あきこのむすめ}に対する恋情をかろうじて抑えて冷静を保った折の源氏の言。現在の自分

の慎重さを自賛しつつ若き日の所業を回顧する文脈に、「罪深し」という語が見出されるが、その「罪深」さが「仏神もゆるし給ひけん」と語られている点に、「罪」という語に対する扱いの軽さを感じられる。

三

もちろん密通そのものを指すいちじるしい「罪」の使用例が確認できないとはいっても、その周辺に「罪」という語がしばしば用いられているということの意味は過小評価すべきではない。たとえば「この世ならぬ罪」(賢木巻)という「罪」にしても、それは在五中将業平の『伊勢物語』には稀薄であった仏教的思考の、物語への浸透として無視できない事柄だからである。だが、それにしても光源氏と藤壺との密通は、なにゆえ「罪」という語と疎遠な状態で語られることになったのだろうか。

「罪」という語の関与が浅いからといって、『源氏物語』が密通を肯定的、楽天的に語っているわけではない。この観点から、光源氏と藤壺との密通関連記事に用いられた「おそろし」および「そらおそろし」という語の「異状に多いこと」に注目し、「作者のこの事件に対するきびしい意識」を探り出したのが、関根慶子「藤壺物語はいかに扱はれてゐるか」⁽⁴⁾という論文である。

あらためて本文を見直すと、これまで列挙した引用文中にもすでに「おそろし」はあった。すなわち「罪」という語が姿をあらわさない若紫巻の密通の場面に、「内へもまゐらで三日籠りおはすれば、又いかなるにかと御心動かせ給ふべかめるも、おそろしうのみおぼえ給ふ」(三二七六―七頁)、また父帝からはじめて藤壺の生んだ御子を見せられたときの「中将の君、面の色変はる心ちして、おそろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、

かた／＼うつろふ心ちして」(紅葉賀 田二五三頁)、そして須磨下向に際しての藤壺への別れのあいさつの「かく思ひかけぬ罪にあたり侍るも、思う給へあはすることのひとふしになむ、空もおそろしう侍る」(須磨 田一七頁)といった源氏の例である。

これら源氏の例にたいして藤壺の側は以下のとおり。源氏との密通後、懷妊に気付いた藤壺は、何も知らぬ帝からのたびかさなる見舞いにおののき、

……なほのがれがたかりける御宿世をぞ命婦はあさましと思ふ。内には御もの、けのまぎれにてとみにけしきなうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。いとゞあはれに限りなうおほされて、御使つかひなどのひまなきも空おそろしう、ものをおぼす事ひまなし。(若紫 田一七七頁)

帝亡きあと、政治的にも後見者である源氏に一再ならず迫られては、源氏とのことで帝の目を欺いたままであったことを恐ろしく思い、さらにはこの期に及んでの事の露頭を恐れるのであった。

又頼もしき人もものし給はねば、たゞこの大将の君をぞよろづに頼みきこえ給へるに、猶このにくき御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶし給ひつ、いさ、かもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いとおそろしきに、いまさらにまたさる事の聞こえありて、我が身はさるものにて、春宮の御ためにならずよからぬこと出で来なんと、おぼすに、いとおそろしければ……。 (賢木 田三五九頁)

関根氏の述べるように、源氏にとつても藤壺にとつても、こと現世に関しては「おそろし」というのが、密通をめぐるとも切実な感情であつたように見える。このことは若紫巻の密通から三十年後、立場変わつて今度は源氏の妻女三宮が柏木という青年貴族の子を生むという事態に直面したときの源氏の心中を語る一文からもはっきり

と知られる。

さてまあやしや、わが世とともにおそろしと思ひしことの報いなめり、この世にてかく思ひかけぬことに向かはりぬれば、後の世の罪もすこしかろみなんや。(柏木 四二頁)

源氏は自分の妻の密通を昔の藤壺との密通の「報い」だと観念する際、かつての自分の振る舞いを「おそろしと思ひしこと」と意識しているからである。ここでも現実の行為(密通)にたいしては「罪」という語は用いられず、それが「後の世」に持ち越されていることに注意しておこう。密通といった尋常ならざる人間関係の内面を描くには、「おそろし」という情意語が「罪」という概念語に優先したということであろうか。

四

源氏、藤壺の密通をその内面から綴る言葉は、しかし「おそろし」「そらおそろし」だけではなかった。密通の文脈に沿って『源氏物語』を読み進めると、源氏に関して用いられる「おほけなし」という語が時おり顔をのぞかせることに気付く。それは「身の程知らずである」(『岩波古語辞典』)という意の形容詞であるが、なにゆえこのような語が密通の文脈に出現するのか、その点の考察は次節にまわして、まずはその実際を見る。

その語が、最初に姿をあらわすのは、「なにがしの院」の怪異によつて夕顔を死なせた直後の、「何の因果でこのようなひどい目にあうのか」と自問自答する源氏の心中である。

からうして鳥の声はるかに聞こゆるに、命をかけて何の契りにかゝる目を見るらむ、我が心ながらかゝる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先のためしとなりぬべきことはあるなめり、忍ぶとも世に